

作品を見るということ ― 公開授業「美術館見学の省察」の報告 ―

授業担当者 稲次保夫

はじめに

今回、公開授業を行ったのは、「コース初歩学習」の中の「美術館見学の省察」の授業である。

「コース初歩学習」は、1回生対象の科目で、美術科では教員全員で担当することになっている。その授業スケジュールは、以下の通り。

【第1回】履修ガイダンス

【第2～13回】美術の各分野（絵画、デザイン、彫刻、工芸、美術教育、美術理論・美術史）ごとに、その分野を専門とする教員が2コマずつ担当し、それぞれの分野についての基礎的な演習を行う

【第14回】美術館見学

【第15回】美術館見学の省察

今回の公開授業は、この第15回「美術館見学の省察」の授業で、実施の日時などは次の通り。

日時：2009年7月27日（月）2時限目

場所：美術理論・美術史演習室

受講者数：9名（造形芸術コースの1回生）

参加教員数：5名（授業担当者を含む）

1、授業の概要

受講生は、第14回「美術館見学」の授業で、愛媛県美術館に行き常設展を見学した（担当：千代田）。見学の後、受講生はレポートを提出した。レポートはA4紙1枚に、①常設展について、②いくつかの作品について、の二つを簡単に記すものである。

今回の公開授業「美術館見学の省察」は、これを承けて行うもので、提出されたレポートをもとに見学を振り返りながら、皆でさまざまな感想や意見・コメントなどを出し合うものである。レポートのテーマ①②のうち、今回は主として②、作品を中心に振り返ることにした。

2、授業の目標

作品を見ること（Anschauung）が目的である。

今回の授業では、作品を見ることに向けての「はじめの一步」として、次のような到達目標を設定した。

- （1）作品を見て自分なりに感じたことを、話したり書いたりすることができる。
- （2）作品から受ける感じ・印象を、作品の造形的な特徴と結びつけて説明することができる。
- （3）他の人が話すことをよく聴き、さまざまな見方や感じ方があることに気づくとともに、それを理解しようとする。
- （4）自ら問題を見出し、自ら考えることができる。

3、授業の展開

（I）はじめに〈5分〉

常設展の「展示作品目録」を見ながら、受講生と授業担当者が少し言葉をやりとりした。見学した各展示室の様子や、どんな作品が展示されていたかを思い出すためである。

（II）レポートを発表し合う〈80分〉

受講生が各々レポートを紹介。それを聴いて皆で自由に質問や感想・コメントなどを出し合った。[コメントを出し易いよう、全レポートの縮小コピーを配布した]

①常設展について〈10分〉

座席順に、まず一言ずつ、レポート①に書いたことを出し合った。自分が書いたことを紹介するだけなので、さほど難しいことではないと思う。①は、②を始める前のいわばアイスブレイキング、あるいはウォームアップである。

②いくつかの作品について〈70分〉

今回の常設展には、松本山雪と近世絵画、福田平八郎、野間仁根、現代作家の作品、海外の名作、杉浦非水などコーナーがあり、各コーナーに多くの作品が展示してあった。受

講生は、その中の印象に残った二・三の作品について発表した。授業担当者は、受講者が発表する作品の図版を『愛媛県美術館所蔵作品選』および「作品説明カード」などの資料から探し出し、OHCを使って皆で見ることができるようにした。

初めは座席順に発表していたが、同じ作品を複数の人が取り上げている場合もあり、一人がある作品について話していると「その作品については私も書いているのですが、……」というような発言が出る。また授業担当者も、縮小コピーで確かめながら、同じ作品について書いている人を指名して「〇〇さんも、これについて書いてるけど……」と言ってコメントを求めた。一つの作品についても、さまざまな見方や感じ方があってとても面白い。そんなこんなで、座席順の発表というより、むしろ作品ごとに見てゆくことになった。

複数の人が取り上げた作品には、マリノ・マリーニの『踊り子』、福田平八郎の『水蜜桃』『林檎』、野間仁根の『花実と白鷺』などがあつた。

マリノ・マリーニの『踊り子』は、ほぼ等身大の彫像で、顔をやや上に向け、両手を少し広げて立つ少女の像である。左足を後ろに引いて構え、右足はシューズのつま先をそっと立てている。モニター画面に映し出された作品を皆で見ながら、この作品を取り上げた三人の発表を聴いた。「かわいらしいポーズ」「デフォルメされた形」「顔がマンガのよう」「不安を抱かせる少女」「とても誇らしげで自信にみちている」「右手の手首の曲げ方が好き」……。これらの発言ごとに、授業担当者はOHCを操作して、少女の顔や手の部分を拡大したり、身体全体を映し出したりした。そういえば、少女のまん丸い眼はマンガのようでもあり、不安そうにも見える。それなのに、「誇らしげで自信にみちている」ように見えるのは、顔を上に向けて胸を張る少女の、その姿勢によるのであろう。三人の発言の中には、「緊張感のある作品」「すがすがしい作品」というのもあつた。言われてみ

れば、確かにそんなふうに感じられる。「ピン！とのばした手足」と「はりつめた表面」が、作品に「緊張感」と「すがすがしさ」を与えているのかもしれない。

福田平八郎の『水蜜桃』は、皿に盛られた桃を描く作品で、「うぶ毛のたった」「やわらかな」桃が、「甘く香っていそう」に描かれている。皿に盛られた7～8個の桃の、その形がつくるリズムも心地よい。桃の写生的な描写と、背景をなす赤と緑の平坦な色面との対比が面白い。なお、同じコーナーにあつた『雉』についてレポートしている者がおり、そこに描かれた緑のシダの葉に、「砂か何か光るものを混ぜて描かれているように思えた」という。『水蜜桃』が紙に描かれているのとは違って、『雉』は絹地に描かれており、絹の地に顔料がやや厚く塗られている。「光るもの」は、岩緑青の粒子が輝いているのか、あるいは何か透明な原石を粉にして混ぜているのかもしれない。

野間仁根の『花実と白鷺』は、水辺に遊ぶ6～7羽の白鷺と花実（薄と葡萄か？）を描いた油彩画。この作品を取り上げた人のコメントによると、「中央の2匹の白鷺を、左は赤、右は黄と水色でふちどっていたのが斬新ですごいと思った」「ひねくれた所がない清々しい作品」「背景も、波の上に小さな魚がはねていたり、細かい遊び心があつて好きでした」。

このように、作品を一つ一つ見ているうちに、気がつくと、残り時間がほとんどなかつた。

(Ⅲ) 授業を振り返る (5分)

この授業を振り返って、面白かつたこと・気づいたこと・問題に思うことなどを、受講生に尋ねた。授業担当者としては、皆が他の人の発言をよく聴いているかどうか確かめたかつた。

最後に、常設展で見た絵には、屏風・掛け軸・額装・その他さまざまな形式のものがあつたことを指摘し、絵の画面の形についての問題意識を喚起した。

4、留意した点

授業の展開の中で、担当者が留意したことをいくつか記しておく。

- (1) 発表し易いように、また発表に対する感想やコメントを出し易いように、予めレポートの縮小コピーを配布しておいたり、その都度OHCを使って作品の部分を拡大して見せたりたりした。
- (2) 受講生のレポートや発表には、作品から受ける感じ・印象をあらわす言葉が多く出た。授業担当者は、受講生のそうした言葉と、作品の形とを媒介する役割を果たすように努力した。
- (3) 授業担当者はできるだけ発言を少なくし、受講生の発言を期して待つようにした。(しかしながら、つつい授業担当者がしゃべってしまいがちだった。)

5、参加教員のコメント

今回の公開授業には、授業担当者のほかに、4名の教員の参加があった。参加教員からは、授業後に行われたカンファレンスおよび文書で、貴重なご意見やコメントを頂いた。以下に、そのいくつかを挙げておく。

〈肯定的と思われるコメント〉

- 授業は、設定された到達目標に、ほぼ相応しいものだった。
- 全員で作品を見ながら(OHC・テレビ)、担当者が話すとき、分かり易かった。
- 授業では、作品一つ一つをていねいに見て行っていた。
- 「教員が発言を抑制し、学生の発言を待つ」ことの難しさには同感する。
- 授業の終わりに、学生から「見学を振り返ることができてよかった」とか「(作品を)もう一度見てみたい」という発言があったのはよかった。

〈課題や疑問点の指摘〉

- それぞれの学生の省察について、「どこをほめるか？」ほめられると、学生はうれしいですね。
- 到達目標のハードルを高くして、課題意識を

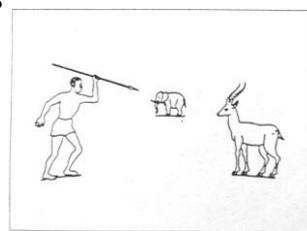
もって取り組めるようにするとよい。

○グループ・ワークの可能性もあるのでは？

補、

この公開授業「美術館見学の省察」の担当者は、同じ「コース初歩学習」の授業で【第8・9回】の「美術理論・美術史についての基礎的演習」を担当した。第8・9回の授業は、今回の公開授業と直接関連するものではないが、参考までにその授業内容を略記しておく。テキストとして岸文和「制度としての遠近法」等を使用した。

【第8回】：A図の2頭の動物、どちらが男の人に近いか？



A図 (W.Hudsonより)

- 象が遠くにいるように見える。→なぜだろう
- 象の方が人に近いと見ることも可能。→平面上の距離
- 象は小さい。→赤ちゃん象？
- 時代・地域・年齢などによって、様々な見方がありうる。
- 自分と異なる見方に対して開かれていること。

【第9回】：A図は、江戸時代の人にはどう見えるのだろうか？

- 彼らが残した絵から推測するしかない。
- 下の屏風絵では、ものの〈大きさ〉〈小ささ〉〈遠さ〉〈近さ〉がどのように表されているか。



奥村政信「歌舞伎芝居図」1731

- さて、江戸時代の人にA図はどう見えると推定されるか。